真夜中三重丸
留年撤回を餌にした
生意気ギャルへの
セクハラ指導

プロローグ
1章　記念すべき初指導
2章　星宮杏奈への生徒指導2日目
3章　大胆になってきたセクハラ指導
4章　生ハメセックス指導
5章　見られながらの指導
6章　堕ちたギャル
エピローグ

プロローグ

俺の名前は凌田哲男。聖愛女学園の体育教師を２０年以上務めている。
この学園の生徒は可愛くて真面目でおしとやかな女の子ばかりだ。
身長は１８０㎝、筋肉質な体形で強面な顔をしていることもありこの学校の大人しい女生徒たちは俺を怖がって逆らってこなかった。
なので生徒指導をする立場にいる俺はそれを利用して女生徒に対して服装検査と称して胸を触ったりブラウスやスカートをめくらせて下着を確認するなどのセクハラ指導を繰り返していた。
それだけにはとどまらず、女子高生に対して異常な性的欲求を持つ俺は校内の様々なところにカメラを仕掛けて着替えやトイレを隠し撮りし、夜な夜なその動画をオカズにして自慰行為を行っていた。
しかしそんな俺の生活を邪魔する存在がいるのだ。
「おはようございます」
「はい、おはよう」

いつものように朝の校門前で登校してくる女生徒たちを出迎えつつ未成熟な彼女たちの身体を舐め回すように眺める。
やっぱり制服姿の女子高生が一番可愛いよな。
２０代前半くらいまでの若い女が好きだが特に一番興奮するのは１０代のＪＫだった。
１０代特有の幼さや無邪気さを持ちつつ身体は少しづつ丸みを帯びてきて大人の色気が漂ってきている年頃の少女達の姿を見るとたまらんものがあった。
そうやって生徒たちの身体を楽しんでいるとチャイムが鳴ると同時に１人の女生徒が息を切らせながら走ってくる姿が見えた。
彼女の名前は星宮杏奈。
この学校で俺の言うことを聞かないただ一人の生徒だ。
金髪で長い髪をポニーテールにしており、健康的な小麦色をした肌。
制服を着崩していてシャツの胸元は大きく開いているため赤の派手なブラジャーと谷間がくっきり見える。
少し屈めばパンツが見えそうなほど短いスカートを履き化粧をしており、この学園には珍しい、いかにも不良ギャルという感じの女生徒である。

気の強そうな顔立ちをして美人なのだがその表情は常に不機嫌そうだし目つきも悪い。
身長は高く１６５センチ近くはあるだろう。
足が長くスタイルが良い。
尻も大きく俺好みなのだが特筆すべきは男なら誰もが視線を奪われてしまうほどのデカすぎるエロ乳だ。
巨乳でＨカップぐらいあるだろうか？
ブラウスのボタンが今にもはち切れんばかりで、歩くたびに揺れまくり、今にもこぼれ落ちてしまいそうである。
「お前、今日も遅刻か！何回言えばわかるんだ！」
注意すると彼女は舌打ちをして睨みつけてきた。
そして俺を無視して通り過ぎようとするので肩を掴んで止めた。
「おい待て」
「んだよオッサン」
星宮はチッっと舌うちをし俺を鬱陶しそうに見たあとまた歩き出そうとしたので今度は腕を掴んだ。

「だからなんなわけ？」
「なんだじゃないだろう？もう授業が始まるぞ」
「うっせーなぁ、マジ説教とかウゼーんだけど」
「ボタンも閉めずにスカートをそんな短かくして、もう少し真面目になったらどうだ？」
「ハァ～、ウッザ。まじでセクハラだからそういうの止めてくんないかなあ、超迷惑なんですけどぉ～」
眉間にシワを寄せて不快感を表してくる。
「俺はただ服装の乱れを正すように言っているだけだ。それにこれはセクハラではなく指導の一環だ」
「指導とかいって胸触ったりスカートめくったりやりたいだけじゃん。セクハラオヤジのくせによく言うわ」
星宮は挑発するようにニヤリとした笑みを浮かべた。
反論しようとすると授業開始のチャイムが鳴り始めたので仕方なく諦めて手を離すと勝ち誇ったような笑顔を見せた後走り去っていった。

まったくあのクソ生意気なメスガキめ……そのエロい体、絶対俺のモノにしてやるからな……。

1章　記念すべき初指導

朝の職員室での会議中、星宮杏奈の担任の教師が口を開く。
「皆さんにお話したいことがあります。実は星宮さんの成績があまり芳しくありません。遅刻が多いうえに授業を頻繁にサボったりテストの点数も赤点ばかり。この成績のままでは進級させるのも厳しい状況なのです」
それを聞いた俺は星宮を俺のものにするチャンスが来たと思った。
「ふむ、確かに星宮の成績は良くないな。生活態度も最悪だ」
俺が同意すると他の教師たちも口々に
「私も前から気になっていたんですがあまりにも酷いですよねえ。遅刻も多いし」
「この前も服装指導の時に注意しましたが全然改善されませんでした」
「私は授業中に居眠りをしていて寝言を言っているのを聞いたことがあります」
星宮に対する不満を口にした。
そして一人の先生が俺の求めていた言葉を口にする。

「彼女には厳しい処分が必要なのではないでしょうか？」
それを皮切りに他の先生たちが次々と声を上げる。
「彼女の素行の悪さは目に余ります」
「留年・退学も視野に入れるべきです」
「そもそも彼女みたいな不良はこの学校に相応しくないと思います」
「その通りだ。彼女がこのまま学校にいるのは生徒たちのためにならない」
などと皆口々に言い合う。
あまりにも理想の展開に心の中でほくそ笑んでいた。
「まあまあ、落ち着いてください。さすがにいきなり留年は厳しすぎるでしょう。私に星宮の指導を任せてもらえませんか？」
俺が提案するとその場の空気が変わる。
「そうですね。とりあえず凌田先生に星宮さんの指導を任せてみるのはどうでしょうか？」
「それが良いかもしれませんねぇ」
「じゃあ決まりで！」

皆、本音では星宮に関わりたくないため、俺に押し付けることが出来てほっとしている様子だが俺としてはこの状況は願ったり叶ったりだ。
「星宮の処遇は私に一任してくれるということでよろしいですか？留年もしくはさらに厳しく退学処分も辞さないつもりでいます。なので私のやり方で彼女を更生させてみようと思うのですが」
そう言って俺は皆を見回す。
誰も何も言わず俺に任せるつもりの様子だった。
「わかりました。星宮杏奈のことは私が責任を持って指導します」
「えぇもちろんです」
「よろしくお願いしますね」
こうして星宮杏奈は俺によって指導されることになった。
「それでは、星宮に放課後生徒指導室に来るよう伝えてもらえますか」
杏奈の担任に頼む。
「わかりました。しっかり指導してあげてください」
「もちろん厳しく指導しますのでご心配なく」

放課後、俺は生徒指導室で待機し、星宮が来るのを待つ。
しばらくしてコンコンとノックをする音が聞こえてきたので「どうぞ」というとドアが開き星宮が入ってくる。
星宮の格好はいつも通り俺の劣情を煽るもので、俺は思わず生唾を飲み込んだ。
「いきなり呼び出して悪かったな」
「うっせ、死ね」
相変わらず口の悪い奴だ。
しかし、そう言った態度を取れるのも今日までだと思うと可愛く思えた。
「それで用件は何だよ」
「とりあえずそこに座れ」
目の前にあるソファーに腰掛けるように促すと「チッ」と舌打ちをして乱暴に座り込んだ。

「お前、最近授業を全く出ていないようだな」
「うっせーなぁ、別にいーじゃん。つかあんたウゼーから消えろ」
相変わらず反抗的な態度をとる。
「遅刻も多いし、この間のテストだって赤点だらけじゃないか」
「あぁん、なんか文句あるのかよぉ！？」
「いくらなんでもこれは酷すぎないか」
「るっさいなぁ！アタシの勝手だろぉ」
星宮がヒートアップしてきたところで本題に入る。
「実はな、朝の会議でお前のことが話題になって他の先生たちから留年させたほうが良いんじゃないかという話になったんだよ」
それを伝えるとさすがに星宮も留年になるのは嫌らしく「マジで？」と動揺していた。
「まあ、ほとんど留年は決定事項だ。場合によっては退学処分もあり得るな」
「ふざけんなし。そんなの納得できるわけないじゃん」
「授業に出ない、遅刻も多い、テストも赤点ばかりのお前がまともに進級できるはずないだろ！」

「そ、それはそうかもしんないけど、でもだからっていきなり留年になるって言われても困んだけど」
強めに脅してやるとさすがに自分の置かれている状況の不味さに気づいたようで、声が小さくなりかなり焦っていることが分かる。
「今まで散々好き勝手にやってきたんだから当然の結果だろ」
「はぁ、どうにかなんないのかよ……」
星宮は諦めたように溜息を吐き、不安げな表情で俺を見た。
「まあ、俺も鬼ではないし可愛い生徒をいきなり留年にするのは忍びないということで、他の先生たちに掛け合ってみたんだ」
「え、そうなの……？」
期待するような目で俺を見る。
「それである条件でお前の留年を無しにしてやってもいいということになった」
「条件？どんなの？」
「それはだな……」
俺は立ち上がり星宮の隣に座ると太ももに手を置き撫で回す。
「何すんだよ。セクハラおやじ！」

俺の手をはねのけ、睨みつけてくる。
「そんな態度をとっていいのかな？」
「どういう意味だよ！」
「分からないのか？条件というのはな、お前が俺の指導を毎日きちんと受けることだ。ただしきちんと受けたかどうかは俺の機嫌しだいで決まるということを忘れるな」
脅迫するように言うと再び星宮の太ももを撫でる。
「指導って……そういうことかよ。この変態教師！」
罵倒されるが無視してそのまま触り続ける。
星宮の太ももは柔らかく触っていて心地良い。
「おい、いつまで触ってんだよ！！」
星宮は俺の手を振り払うと俺のことを軽蔑したような視線で見つめる。
「あのなぁ、俺の機嫌しだいで留年どころか退学処分もありえるってことを理解していないのか？」
「くっ……わかったから。アンタの言う通りにすればいいんでしょ」
「そうだ。素直なのは嫌いじゃないぞ」

星宮は悔しそうに唇を噛み締めながらそう言うと俺の指示に従うことを決めたようだった。
「まずはお前の服装指導をしてやるからそこに立て！」
命令すると星宮はしぶしぶといった感じで立ち上がった。
目の前に立っている星宮の全身を舐めまわすように見る。
改めて見るとなんてエロい身体付きをしてやがるんだ。
グラビアアイドルでもなかなかいないようなエロくて大きな胸に安産型のデカい尻、そしてむちむちした肉付きの良すぎるエロい脚……。
このメスガキの体を思う存分弄べると思うと興奮が止まらない。
「ジロジロ見んじゃねぇよ、このスケベ教師が！！！」
星宮は嫌悪感丸出しで俺のことを見てくる。
「まったく口が悪い奴だなお前は……。これからたっぷり指導するのにこの調子だと先が思いやられるぞ」
「うっせーな。アンタがエロい目で見てるからだろ。気持ち悪いしまじで消えて欲しいんですけど」

「口答えするな。指導中は俺の言うことは絶対だ。お前は黙って俺の指導を受ければいい」
「クソ野郎。ほんっと最低だわ」
普段こんな悪態をつかれたらイラついていただろうが、今の状況では俺を興奮させるスパイスにしかならない。
星宮の態度を気にせず服装指導を続ける。
「シャツの胸元をこんなに開けて、俺を誘惑してるんじゃないだろうな？」
「はぁ、んなわけねーし。自意識過剰すぎ。マジで死ねば？」
星宮は呆れた様子でため息をつく。
「スカート丈も短いし、パンツを見せびらかしたいのか？」
「あぁん、見せつけてなんかねぇし！死ね！」
星宮は俺のことを汚物を見るかのような冷たい目で見ている。
「口の利き方には気をつけろ。お前には厳しい指導が必要みたいだな」
手を伸ばし星宮の左胸を鷲掴みにしてやる。
むにゅっと指が沈み込み、ブラの上からでもその柔らかさが伝わってきた。
「ちょっ、どこさわってんだよ！！放せよ、バカ！！！」

胸に伸びていた手を振りほどくと星宮は怒りの形相で睨みつけてくる。
「なんだその態度は。指導されているのに生意気な態度を取るな」
「はあ、これが指導とか笑えるんですけど。セクハラで訴えてやるからな！！」
星宮は反抗的だが俺が怯むことはない。
「やれるもんならやってみろ。そんなことしてもお前の留年は覆らないし、俺はちょっと謹慎処分になるだけですぐに戻ってくるがな」
「ぐっ……この卑怯者」
留年は絶対にしたくない星宮は言い返せないでいるようだ。
このことを外部に話されたら俺の首なんて一瞬で飛ぶに決まっているだろうに騙されやがって馬鹿な奴だな。
「分かったなら続きをやるぞ」
「はあ？ まだやんの？」
「当たり前だろ。指導は始まったばっかりだ。今から行う指導はこのカメラで全部録画するからな」
カメラを三脚にセットし星宮の全身が映るように調整した後録画ボタンを押す。
「は？これでアタシのことを撮影するつもりなの？マジ引くわぁ～」

呆れたような表情を浮かべるが、内心では恐怖を感じてきたのだろう。
顔が強張ってしまっている。
「そうだ。これから行う指導の内容をしっかりと記録しておかないとな」
「はぁ、もう好きにしなよ。どうせ逆らえないしさ」
星宮は諦めたように溜息を吐き、投げやりな態度をとる。
「まずはカメラに向かって自己紹介しろ。学校名と学年、名前を言え」
「はぁ、マジめんどくさいな。」
星宮はしぶしぶといった様子で名乗る。
「聖愛女学園、２年Ｃ組、星宮杏奈」
視線はカメラの方を向いておらず、斜め下に向いている。
「よし、ちゃんと挨拶できたな。次は下着が校則違反かチェックするからまずはシャツを脱げ」
「はあ？ なんで脱がなきゃいけないわけ？」
「いちいち反論するな。留年したくないなら俺の指導を黙って受けろ」
「チッ……」
星宮は舌打ちをすると渋々と言った感じでリボンを取りボタンをはずしていく。

そして、ボタンをすべて外すと乱暴にシャツを床に投げ捨てる。
「これでいいんだろ。見たけりゃ勝手に見ろよ」
「なら、遠慮なく見させてもらおうか」
グラビアイドル顔負けの巨乳は彼女の風貌にぴったりの派手なヒョウ柄のブラに包まれており、呼吸をするたび上下に揺れ動く。
「こんなデカパイめったに拝めないぞ。何カップあるんだ？」
「H……」
「聞こえないぞ。はっきり答えろ！」
「だから、Hだって言ってんだろ！」
Hカップという言葉が耳に届いた瞬間、目は星宮のデカパイに釘付けになり、股間が熱くなる。
「ほぉ、Hカップか……これはなかなかのものだな。」
「ジロジロ見んなよ、この変態教師！」
睨みつけてくるが、そんなことを気にせず星宮のおっぱいを凝視する。
未だに成長中なのかサイズが合っていないブラがはち切れそうになっている。

こんなものを見せられたら我慢できるはずもなくブラ無しの生おっぱいを拝みたい欲求が沸々と湧いてくる。
「お前、そのヒョウ柄のブラは校則違反だって分かってるよな？」
「んなもん知るわけねーじゃん！これはアタシが好きでつけてんだよ」
「そんなことはどうでもいい。そのブラは没収するから脱げ」
「はあ！？ふざけんな！」
「指導に従わないのか？それとも留年したいのか？お前がどんな選択をしようと俺は構わないが」
「くそがっ！外せばいいんだろ！」
こちらを睨みつけて強気な態度を必死で崩さないようしているが、動揺していることが丸わかりだ。
手は震え上手くブラのホックを外せずにいる。
「早くしろ、いつまで待たせるつもりだ？」
「うるせぇな。黙って待ってろよ！」
ようやくホックを外すことに成功したようだが、肩紐をずらした状態で固まってしまう。

「おい、何をもたついている。さっさとブラを取れ」
「わかってるっつーの！」
苛立った声を上げながらブラを勢いよく取るとぶるんっと大きな乳房が露わになった。
かなりの質量を誇っているにも関わらず重力に逆らってツンと上を向いており、健康的な小麦色の肌ときれいな桜色をした突起物とのコントラストが美しい。
これが星宮の生乳か……。
今まで何度も妄想していた光景だが現実では想像以上の迫力があるな……。
思わずゴクリと唾を飲み込む。

「はあ、マジ最悪……。なんでアンタなんかに胸を見られなきゃいけねーんだか」
星宮は嫌悪感丸出しで俺のことを見てくる。
「指導のためだ。仕方ないだろう」
星宮のデカい胸をまじまじと見つめる。
胸の谷間に汗が滲んでおり、艶めかしくてエロい。
さすがに俺の視線に耐えられなくなったのか星宮は腕で胸を隠すと睨んでくる。
「ジロジロ見てんじゃねぇよ！！マジで気持ち悪いんだけど」
「おい、手は頭の後ろで組め。胸を隠したら指導にならないだろうが」
「うぜぇな。こんなもん見て楽しいのかよ」
「ああ、とても興奮するな」
「はぁ、マジで気持ち悪いわ」
星宮は深いため息をつき、諦めた様子で両手を頭の後ろに回す。
「胸を張って、もっとデカパイアピールしろ」
「うっざ……」
星宮は悪態をついた後、言われた通りに胸を張る。

張りのある大きな乳房がぷりんと突き出されその姿勢をキープさせる。
「いいぞ、そのままじっとしているんだ。じっくり観察してやるからな」
「このスケベ野郎……。もう好きにすれば」
強がっているものの星宮の体は小刻みに震えており、顔は羞恥で真っ赤に染まっていた。
立ち上がり近づいていく。
「お、近くで見るとますますエロいな」
「あんま近づくなよ。臭いしマジで無理」
「はは、ひどい言われようだな。それにしても何食ったらこんなエロいデカパイに成長するんだ？」
「し、知らねぇよ。てか、もう離れてくんない？」
そんなことを言われても離れるはずがない。
近くで見る星宮の胸は本当に引き込まれるほど綺麗だったからだ。
絶対に揉んでやる。
このデカパイを俺の手でめちゃくちゃにしてやる。
そんなことを考えていたら自然と手が動いてしまった。

むぎゅっと両手で鷲掴みにした瞬間今まで味わったことのない柔らかさ、肌の吸い付き具合、そして手に収まりきらないほどのボリュームに感動で手が震えてしまう。
頭の中で快楽物質が大量に分泌されているのを感じる。
こんなのは麻薬と一緒だ。
一度知ったら二度とやめられなくなる、それほどの快感だ。
「はあ、はあ、はあ」
荒くなった呼吸を整えようと深呼吸するがうまくいかない。
「ちょ、マジで何してんだよ！放せよ！！」
星宮が大声で怒鳴ってくるが、構わずに両手を動かし続ける。
柔らかくもちもちとした極上のおっぱいを揉んでいるだけで射精してしまいそうだ。
「やばいな、これは病みつきになる……」
女子校生の若い肌が手に吸い付き、いつまでも触れていたくなる。
胸を激しく揺らしたり、円を描くようにして捏ねたりとやりたい放題に弄り回していく。

「はぁ、はぁ、はぁ……」
あまりの心地良さに息が乱れ、頭がボーっとしてくる。
しかし、まだ満足できていないのでさらに刺激を与えていく。
「くぅ……っ！」
星宮の口から苦しそうな声が上がるが気にせず続ける。
今度は下から持ち上げるように持ちあげてみた。
重量感のあるおっぱいが指の間からこぼれ落ちそうになる。
その重さと弾力を楽しむように何度も繰り返す。
「マジでキモイ。いつもエロい目で見られてると思ってたけど、やっぱり指導とか言って胸触りたかっただけじゃん」
星宮は吐き捨てるような口調で言い放つ。
「違うぞ……これはお前のエロ乳が校則違反だからチェックしていただけだ」
「はあ？何言ってんの？意味わかんないし」
「とにかくこれは指導なんだ。お前みたいな不良には分からないかもしれないがな」
「はいはい、分かったからさっさと終わらせてくれませんかね～」

「いいから大人しくしてろ」
星宮の胸を楽しむ余裕が出てきた俺は、乳首をつまんだり、軽く引っ張ったりと様々な方法で可愛がっていく。
「んっ……くっ……」
敏感な部分を責められるたびに星宮は甘い喘ぎを漏らす。
「どうした？感じてきたのか？」
「んなわけねーだろ！バカじゃねえの！」
強がってはいるが明らかに反応が変わってきたことに気付く。
それを裏付けるように胸の先端はコリコリと芯を持ち始めており、可愛らしい桜色だったものが少し赤く淫靡な色に染まってきた。
その反応にたまらなくなり顔を胸の谷間に埋めると、蒸れた汗の匂いが鼻腔を満たしていき、それだけでイってしまいそうになった。
「気持ちわりぃーんだよ！」
俺の頭を掴み引き剥がそうとするが、力が入らないようで弱々しい。
舌を伸ばし汗ばんだ谷底を這わせていった。
「ひっ……！」

驚いたような声を上げるが気にせず続けていく。
口の中にしょっぱさが広がり、脳が痺れる感覚に襲われる。
その甘美な味わいを楽しみながら谷底から徐々に上へと向かっていき、頂点に到達すると唇で挟み込みちゅうっと強く吸った。
「ひゃう！？」
その瞬間、星宮は甲高い悲鳴を上げビクンッと体を震わせた。
「な、何やってんだよ！マジで信じらんねぇ！！」
怒りに満ちた表情で睨みつけてくるが、頬は紅潮しており息も荒い。
そんな様子の星宮を見て嗜虐心がくすぐられ興奮してしまう。
もっといじめてやりたくなってきた。
じゅる、ちゅぱっレロレロっと音を立てながら乳首にしゃぶりつく。
「はぁ、マジきもちわる……いい加減離れろよ」
そう言う星宮の声は震えていて、どこか艶っぽさを感じさせる。
「お前のおっぱい旨すぎだろ。ずっと味わっていたくなるぞ」
「マジ、死ねよ……いいかげんにしろ」
星宮の罵声を無視し、今度は反対側の乳房を口に含んだ。

舌で乳首を転がし、吸い上げ、時には歯を立てて甘噛みする。
「くっ……この変態野郎……」
星宮は憎々しげに睨みつけてくるが、その瞳には涙が浮かんでいた。
荒くなった息を整えるために口を離すと唾液まみれになった乳首がテラテラと光っており、なんとも言えない背徳感を覚える。
星宮の乳首はビンビンに勃起していて、先ほどよりも色が濃く、大きさも増していた。
「おいおい、エロい乳首になっちゃったな」
「うるせぇな……マジでふざけんなよ」
強気な言葉を発するが、震えた声ではまったく迫力がない。
「そろそろパンティもチェックさせてもらうぞ」
「勝手にしろよ」
諦め顔で返事をすると、渋々指示に従いスカートをたくし上げる。
そこにはブラとおそろいの派手なヒョウ柄パンティが存在していた。
「なんだこれは？さすがにこのドスケベパンティは校則違反だな」
「はあ、マジでウゼェんだけど」

星宮は嫌悪感丸出しで睨みつけるが、顔は真っ赤になっており羞恥でいっぱいになっていることが窺える。
「これはしっかりチェックしないといけないなぁ。脚を開いてガニ股になって腰を突き出せ！」
「マジでクソ野郎だな。やればいーんだろやればよ！」
星宮は悪態をつくとスカートをたくし上げたままゆっくりと足を開いてガニ股になると、腰を突き出しパンティを見せつけるようなポーズになる。
「いい格好だなぁ星宮ぁ。そのままじっとしているんだぞ」
「うぜえんだよ！早く終わらせろ」
「はは、偉そうだな」
星宮は強がっているが恥ずかしくて仕方ないようで、顔は真っ赤に染まっている。
「それじゃあ、パンティチェックさせてもらうぞぉ」
その場にしゃがみ込むと股間に顔を近づけていく。
「うわっ！マジ近寄んなし」
星宮が叫ぶが構わずに至近距離まで顔を寄せパンティを食い入るように見つめる。

「こんなの女子高生が履いていていいパンティじゃないなぁ。ドスケベすぎてびっくりしたわ」
「くっ……殺す……」
星宮は悔しげに歯を食い縛るが、体は正直で羞恥で震えていた。
「触って素材も確かめないとなぁ」
「やめっ……」
俺は制止の言葉を無視してパンティ越しに秘部を撫でる。
そこはすでに湿っていて指先にぬちゃっとした感触があった。
「あれ、なんか湿ってるみたいなんだが、なんでだろうなぁ？」
「知るか！黙れ！死ね！」
星宮は怒りと屈辱で顔を歪ませて怒鳴り散らす。
「そんなに怒ることないだろう？ほら、確かめないといけないからパンティ脱げ」
「はあ？マジで頭おかしいんじゃねぇの」
「いいからさっさとしろ、留年したいのか！」
「チッ……」

星宮は舌打ちしてから、ゆっくりパンティを脱いでいく。
「早く脱げよ」
「分かってるっつーの……」
苛立たしげな口調で言うと星宮は一気にパンツを下ろした。
俺は星宮が手に持ったパンティを奪い取ると、裏返しクロッチ部分を眺める。
そこにはねっとりとした透明な液体が付着していた。
「おいおい、これは何だ？」
「知らねえよ」
星宮はぶっきらぼうに答える。
「この染み何か臭わないか？汗とはまた違う臭いのような気がするんだが……」
クロッチ部分を鼻に押し付け思いっきり息を吸い込んだ。
「マジやめろって！マジ死ねよ！」
怒鳴り声を無視してクンクンと何度もしつこく嗅ぐ。
濃厚な女の香りが脳天にまで突き抜けていく。
「ああ、たまんねぇな……」
「マジで気持ち悪いんだけど……」

星宮は引き気味の表情を浮かべて後ずさる。
「いやらしいメスの匂いがするなぁ。これはマン汁だろ？」
「だから知らないっつの！」
「嘘つくなよ。本当は知ってるんだろ？これが何なのか」
「くつ……」
星宮は答えないが、その表情は明らかに動揺していた。
「まあいい。直接確かめてやるからもう一回スカート捲れ」
「はあ？ふざけんな」
悪態をつき反抗的な態度をとるが、俺の命令に逆らえないことは分かっているはずだ。
「もう一度言う。スカートを捲れ！」
「わかったよ。このスケベおやじ！」
星宮は小さく毒づくと再びスカートを捲り上げる。
「おほっ！」
思わず変な声が出てしまう。
薄めの陰毛はきれいに整えられており、手入れされているのがよく分かる。

割れ目はぴったりと閉じられており、派手な星宮の見た目とは真逆の清楚な印象を受ける。
しかし、そのギャップが逆にエロさを醸し出しており、俺の興奮は最高潮に達していた。
「顔に似合わずきれいなまんこしてるじゃないか」
「うるせぇな。マジで気持ちわりぃんだよ」
星宮は顔をしかめて悪態をつく。
俺はそこに手を伸ばして、まずは指先をあてがった。
そこは熱く潤っていて、ぬるっとした粘液が指先に絡みついた。
指の腹で撫で回すようにすると、くちゃっくちゃっと音が響いてきたのである。
「おいおい、マン汁がくちゅくちゅいってんぞ」
「マジで黙ってくんない？」
星宮は苦虫を噛み潰すような表情でこちらを見ている。
「どうした？感じてるのかぁ？」
意地悪く聞いてみると、星宮の顔がさらに紅潮していく。
「はぁ！？マジで意味わかんないし！マジで死んでほしいんですけど」

「そうか、じゃあもっと指導してやらないとなぁ」
さらに強く擦ってやると、くちゅっという湿った音とともにトロトロと大量の蜜が溢れ出てきたのだ。
「くそ変態教師！さっきから変なところ触りすぎなんだよ！」
「ほらお前のまんこからエロい糸引いてるぞ」
「マジで気持ち悪いからもう止めろよ」
「まだまだこれからだぞ」
皮に包まれているクリトリスを剥き出しにすると親指の腹で優しく刺激してやる。
「ひゃうっ！」
星宮は甲高い悲鳴を上げビクッと体を震わせた。
「なんだ今の可愛い声は？」
「マジで死ねよ……」
星宮は恥ずかしそうに顔を赤らめると憎々しげに睨みつけてくる。
「クリトリス気持ちいいんだろ」
「んなわけあるか！マジで死ね」
星宮が抵抗してくるのが面白く、俺は調子に乗って執拗にそこを攻め立てる。

すると次第に星宮の息が上がり始め、脚がガクガクと震え始める。
「ほらほら、ここが良いんだろ」
「マジでふざけんなよ……マジでふざけんな……」
星宮は悔しげに歯を食い縛り、目に涙を浮かべながら必死に耐えていた。
秘部からはマン汁が流れ出て太ももに垂れている。
その溢れ出るエロ汁を指に塗り、滑りを良くして敏感な突起を弄ぶと、星宮は腰をくねらせて反応する。
「んんっ……あぁっ……」
星宮は甘い吐息を漏らし、腰を振って悶えていた。
「おいおい、腰動いてるぞ。気持ちいいんだろ？」
「ち、違っ……あぁっ……」
否定の言葉を口にするが、体は正直で腰の動きは止まらなかった。
身体はビクビクと震えて絶頂寸前なのがバレバレだ。
「早く終わらせろ！マジきもちわりぃ」
強気な態度を見せるが腰をくねらせ脚をガニ股にして、自ら快楽を求めている姿は滑稽だった。

「そうだなぁ。要望通りさっさと終わらせるかぁ」
俺はそう言うと、クリトリスを摘んで上下に激しく扱き始めた。
「ちょっ！待っ……くぅっ……んんっ……」
星宮は焦ったように制止の声を上げるが、俺は構わずに扱いていく。
スカートを掴んでいた手を離し必死に俺の手を払いのけようとするが力が入らず、ただ添えてあるだけになっていた。
「クソ教師……あっ……やめろ、最低野郎、んっ……きもいんだよ！！死ね！死ね！」
罵声を浴びせ続けてくるが、その声には余裕がない。
俺は気にせずに手を動かし続ける。
指先でコリッコリッと転がすと、星宮は面白いくらいに反応してくれる。
「ほらドスケベエロまんこ無様にアクメきめろ。俺の前でエロ汁ぶちまけてイケ！！」
「誰がイクか！死ね！死ね！」
星宮は怒鳴り散らすが、もはや力はない。
「くっ、あぁっ、や、やばいって、あぁっ」

俺の肩を掴み脚はつま先立ちになり、全身は小刻みに痙攣していた。
とどめにピンッとクリトリスをはじいてやる。
「〜〜〜ッ♡」
プシュ、プシャ、プシャシャ〜！！！
小刻みな痙攣と共に潮を噴くと足に力が入らないようで、そのまま床にへたり込んでしまう。
「あぁ……はぁ、はぁ、はぁ」
星宮は呼吸を荒げてぐったりとしている。
「あれだけ悪態ついてたのにまんこアクメさせられた気分はどうだ？」
「最悪に決まってんだろうが……」
星宮は悪態をつくが、顔は真っ赤に染まっており息は乱れたままだ。
「お前の無様なまんこアクメ見れたしとりあえず今日の指導はここまでにしといてやる。明日の放課後もここで厳しく指導してやるからな」
「マジで死んでくれ」
星宮は心底軽蔑するような目でこちらを見てくる。
「口答えするな。分かったな」

「チッ……」
星宮は舌打ちすると、下着を身につけていく。
そして、制服の乱れを直すと不機嫌そうな表情を浮かべて教室から出ていった。
本当はもっと責めてやりたかったが初日にやりすぎるとやけになってこのことをバラされたり、逃げ出されかねないのでこれぐらいがちょうどいいだろう。
俺は録画中のビデオカメラの停止ボタンを押し、鞄に仕舞う。
その夜、俺は星宮杏奈が無様にイった映像を見ながら自慰を行った。
そして今までで一番最高の気分で布団に横になると明日からどうやって星宮を指導してやるか考えながら眠りに就いた。